様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０３４７５

研究課題名（和文）高齢者の幸福感に及ぼす文化的影響に関するマルチレベル研究

研究課題名（英文）A multilevel study of cultural effects on well-being in older people

研究代表者
廣川　空美（Hirokawa, Kumi）

関西大学・社会安全学部・教授

研究者番号：５０３２４２９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高齢者の幸福感と地域の文化的価値観との関連を調査し、幸福感を高めるための地域づくりについて検討した。幸福感の地域差について、アメリカ合衆国のHRSデータでは、出身地域の教育が高齢期の心身の健康と関連することが示された。日本人の調査データでは、居住地域での教育差があり、移住した人の方が高い教育を受けていた。ヨーロッパ諸国の文化的価値観と幸福感との関連については、快楽主義が年齢と幸福感を媒介していることが示された。日本人の快楽主義には、生活の便利さ、高収入、ソーシャル・キャピタルの高さが関連していた。「祭り」への参加など、ソーシャル・キャピタルを維持する地域の取り組みが必要と考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の結果から、「快楽主義」という文化的価値観が幸福感を醸成する地域づくりのキーワードとして抽出された。「快楽主義」の中心的要素は、娯楽やレジャーの時間を大切にし、自由に意見を述べ、生活を自在にできる、自己のコントロール能力を重視することが示された。自己コントロール能力を育成する環境が地域には求められ、一緒に楽しむことができる仲間も必要であることが分かった。高齢者が幸福感を維持するためには、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域づくりが必要であり、そのためには個人が積極的に地域活動に参画することが求められる。地域には、自己コントロール能力を育成するための教育力が必要とされていることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated associations between psychological well-being and community cultural values in aging individuals and explored methods of community development to enhance psychological well-being. Analyses of the HRS data from the USA indicated that educational levels in one's birthplace were associated with physical and mental health in later life. In analyses of Japanese data, differences in educational levels were observed across living areas, and individuals who emigrated from their living area exhibited higher educational levels. In analyses of associations between national cultural values and well-being in European countries, indulgence mediated the association between aging and well-being. Convenience of life, high income, and abundant social capital were associated with high indulgence in the Japanese data. Community development initiatives, such as "Matsuri (festivals)," may be necessary to maintain abundant social capital.

研究分野：健康心理学

キーワード：高齢者　幸福感　文化的価値　快楽主義　教育　地域づくり　ソーシャル・キャピタル　自己コントロール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本は世界でも有数の超高齢社会である。2018 年の総人口に占める 65 歳以上人口の割合（高齢化率）は 28.1%であり、総人口の減少や平均寿命の延伸に伴い今後も上昇することが予測されている(内閣府, 2018)。内務省(2012)の平成 24 年度版高齢白書における「超高齢化社会の課題」では、高齢者が就労や社会参加を継続したいという意欲を満たすような支援や、高齢者を孤立させないような地域における人とのつながりが挙げられている。どのような高齢者への対策を講じるかによって、心身の健康や幸福感を高める地域づくりに違いが生じるものと考える。

超高齢化社会において、高齢者が活躍を続け、心身の健康状態を維持することが求められる。高齢者研究によると、身体的な機能が低下しても、幸福感は維持される可能性がある(権藤, 2005)。つまり、健康寿命よりも幸福寿命の期間が長いと考えられる。

幸福感は人生に対する認知的評価の側面である心理的幸福感(psychological well-being: Diener, 1994)、現在の感情状態の側面である主観的幸福感(subjective well-being: Ryff, 1989)から構成されると考えられている。また、これらの 2 つの側面は、文化的な影響を受けていることが指摘されており(Diener et al., 2003; Steel et al., 2018)、高齢化社会が進む国際社会において、幸福感に及ぼす文化的影響を明確にする必要がある。また、幸福感をもたらす文化的指標が高齢者の心身の健康にどのように影響しているのかを検証することにより、高齢者の幸福感を醸成するような地域における取り組みを考案できると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、少子高齢化社会が進む米国、ヨーロッパ諸国、日本の高齢者の幸福感と文化的指標との関連性を明確にすることであった。また、その文化的指標が日本の高齢者の心身の健康や幸福感とどのような関連があるのかを検証した。文化的指標として、Hofstede et al. (2010)が提唱した「権力格差」「不確実性の回避」「個人主義・集団主義」「男性性・女性性」「長期的思考・短期的思考」「快楽主義」に注目し、個人の心身の健康や幸福感との関連を検証した。日本人高齢者の個人データの分析結果を基に、幸福感を高める地域要因を抽出し、将来的な地域活動プログラムを考案することを目的として行った。

３．研究の方法

<u>（１）幸福感と地域差</u>　高齢者を対象に心身の健康や幸福感に関する質問を含む地域の代表サンプルによる公開データを用いて抑うつ感(CES-D) の地域差を検証した。米国では Health and Retirement Study(HRS)データを用い、65 歳以上の高齢者 514 名を分析対象とした。出身地と居住地を北西部(Northeast)、中央(Central)、南部(South)、西部(Western)に分類し、出身地はさらにアメリカ以外(Not US)を加えて比較した。身体疾患の数、学歴、収入を調整変数とした。

2023 年 11 月オンライン調査において、日本全国の 20 歳から 79 歳男女 1141 名を対象に、居住地域、出身地域、移住の有無と幸福感との関連を検証した。教育歴と収入、既往歴を調整変数とした。

<u>（２）国レベルでの文化的価値観と幸福感</u>　ヨーロッパの国際比較調査 Survey of Health, Aging and Retirement in Europe (SHARE)データを用いて、幸福感と文化的価値観の関連を検証した。Hofstede et al. (2010) の権力格差、個人主義、男性性、不確実性の回避、長期的思考、快楽主義の 6 つの文化的価値観と、幸福感 (CASP-12) のそろっている 25 カ国の 65 歳以上の年齢の 40,430 名(女性 54.6%) のデータを使用した。

<u>（３）個人レベルでの文化的価値観と幸福感</u>　2022 年アメリカ合衆国の男女 909 名（年齢: 41.3±15.9、女性: 39.4%）と日本の男女 554 名（年齢: 50.3±16.4、女性: 47.1%）を対象に、文化的価値観のうち「不確実性の回避」について、両国間で比較可能な尺度を作成した。また、2023 年 11 月オンライン調査において、日本全国の 20 歳から 79 歳男女 1141 名を対象に快楽主義、死生観と幸福感との関連について検証した。さらに、ソーシャル・キャピタルや祭りへの参加と幸福感との関連を検証した。

４．研究成果

<u>（１）幸福感と地域差</u>　アメリカ合衆国において、居住地域による抑うつ感(CES-D) の差は認められなかった。出身地域による差もなかった (図 1)。しかし、最も抑うつ感が高かった South の出身者では、身体疾患の数が多く、学歴が低く、収入が少ない人の割合が多いことが示された。出身地域で受けた「教育」によって、その後の「収入」や「健康状態」に影響し、高齢期の抑うつ感にも影響を及ぼしている可能性が示唆された。

日本における居住地域による幸福感の違いは、肯定的感情のみ、北海道・東北地方と九州・沖縄地方に統計的に有意な差がみられた。肯定的感情は九州・沖縄地方が高く、北海道・東北地方が低いことが示された(図 2)。しかし、抑うつ感や否定的感情、人生満足度には違いがなく、成育地域や移住の有無による違いも示されなかった。

「教育」「収入」については出身地域よりも居住地域による違いが顕著にみられ、関東地域に

おいて高い「教育」と「年収」が示された。移住による違いは「教育」にのみ示され、移住した人の方が高い「教育」を受けていたことが分かった。高い「教育」を得るために移住した人が、その地域で就職をし、定住しているのではないかと思われる。

アメリカ合衆国と日本とでは傾向が違っているが、幸福感と地域差の関連はなく、「教育」における地域差が重要な要素と考える。

（２）幸福感と文化的価値観　ヨーロッパ 25 カ国のデータでは、6 つの文化的価値観の中で快楽主義だけが幸福感と有意な関連が示された。25 カ国のうち快楽主義が高いのはスウェーデンで、最も低いのはラトビアであった。

ヨーロッパの国々において、年齢が高くなるほど幸福感が下がるが、高齢者の多い国の快楽主義の価値観は高く、快楽主義が高い国では個人の幸福感も高くなることが示された。つまり、高齢者が快楽主義的な文化的価値観の国に住む場合、加齢による幸福感の低下が軽減される可能性が示唆された(図 3)。文化的価値観として、快楽主義が幸福感と関連する要素と考えられた。

日本人データにおいても、快楽主義が年齢と幸福感の関連を媒介することが示された。日本人の快楽主義の価値観に地域差はなく、高齢、生活の便利さ、高年収、ソーシャル・キャピタルが豊かであることが関連していた(図 4)。

（３）文化的価値測定尺度　不確実性の回避について日本語版と英語版の尺度を作成した。将来への不安などを含む「一般的不安・心配」5 項目(α= .77)、変化への抵抗などを含む「変化・違いへの不耐性」5 項目(α= .59)、曖昧な状況への不耐性などを含む「不確実性への不耐性」3 項目(α= .64)、雇用先の継続などを含む「職場・生活に関する価値観」4 項目(α= .54)の 4 因子構造が採用された。

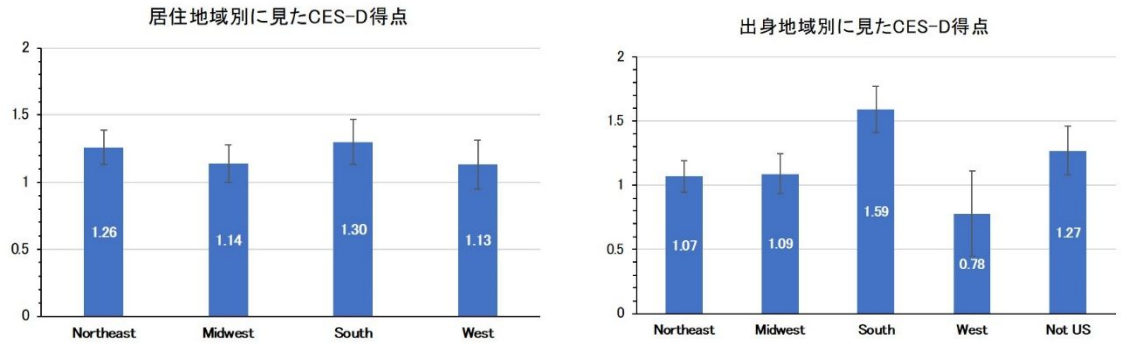

図 1　居住地域、出身地域と抑うつ感　National Institute on Aging からの資金提供を受けて、ミシガン大学によって作成および配布された（許可番号 NIA U01AG009740）。ミシガン州アナーバー（2016 年）

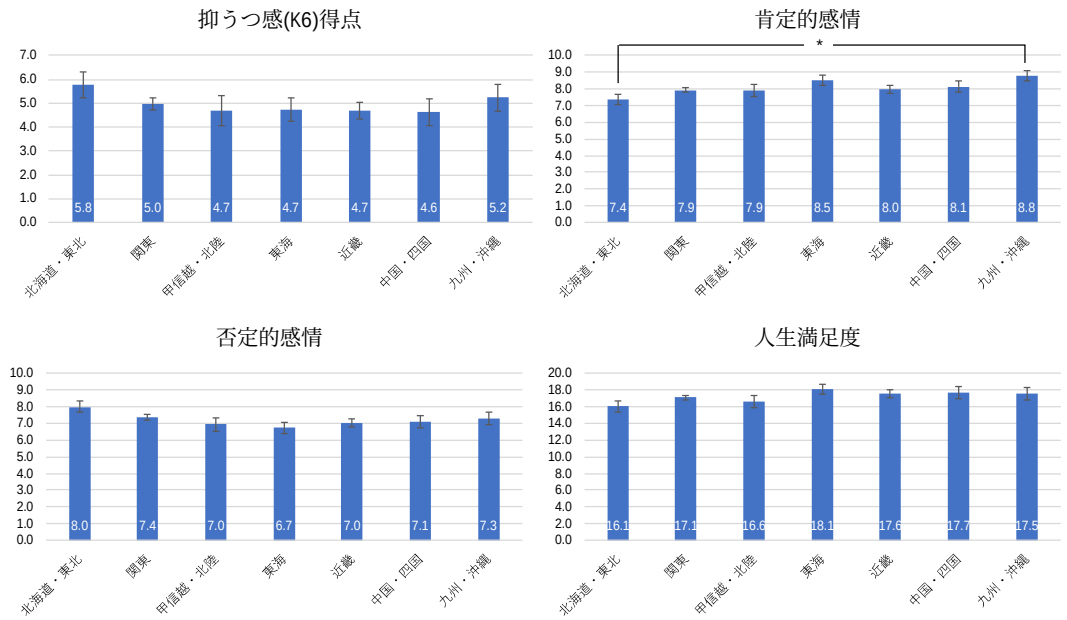

図 2　居住地域による幸福感との関連

Hofstede et al.（2010）によると、快楽主義の価値観は、「人生のコントロール感」「余暇の時間を大切にする」「友人がいること」といった内容で構成されている。この定義に基づき、快楽主義を測定する尺度を作成した。7 項目のうち「道徳的なルールを守ること」「割り当てられた性役割に合わせること」の 2 項目は、重視するほど快楽主義とは対極になる禁欲主義の価値観が強いことになるが、日本人データでは 7 項目すべてが快楽主義としてまとまった（α= .72)。また、40 歳台以下の男女と 50 歳台以上の男女では得点に差があり、高齢になるほど得点が高くなっていた。

死や生に対する価値観や考え方は死生観と呼ばれ、特に死や生に対する「価値観」に焦点を当てた死生観尺度(7 因子)の開発に取り組んだ。死生観が抑うつ感(K6)や人生満足度との関連について、年齢や性別、世帯収入を調整した上で重回帰分析を用いて検討した。その結果、死生観のうち「苦難としての生」「人生に対して死が持つ意味」が抑うつ感(K6)と関連した(図 5)。人生満足度については、死生観のうち「苦難としての生」「人生に対して死が持つ意味」「存在の永続性に対する信念」が関連した(図 6)。生きることを苦難として捉える程度が低いことや、死を人生にとって意味あるものとして考える程度が高いことが幸福感を高めることに寄与すると考えられる。

（4）幸福感を高める地域づくり　ソーシャル・キャピタルが豊かであると快楽主義の得点が高くなることが示され、幸福感も高いことが示された。山田（2016）は、文化資本の継承という観点から、ソーシャル・キャピタルを醸成する要因の一つが、地域の祭りであると指摘している。そこで、日本人男女 1141 名を対象としたオンライン調査において、ソーシャル・キャピタルと祭りへの参加が人生満足度と関連するのか分析を行った。その結果、地域の祭りへの参加頻度が多いとソーシャル・キャピタルは高く（r=.44 p<.001)、また人生満足度も高い(r=.28 p<.001)ことが示された。

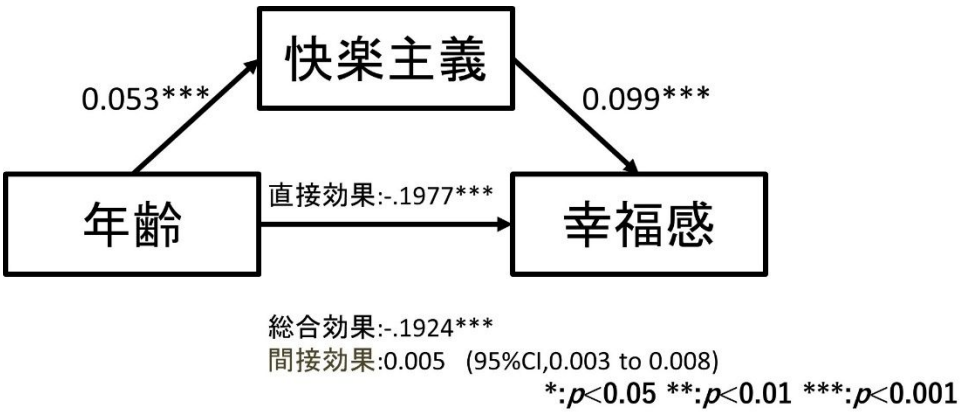

図 3　年齢、文化的価値観と幸福感の関連

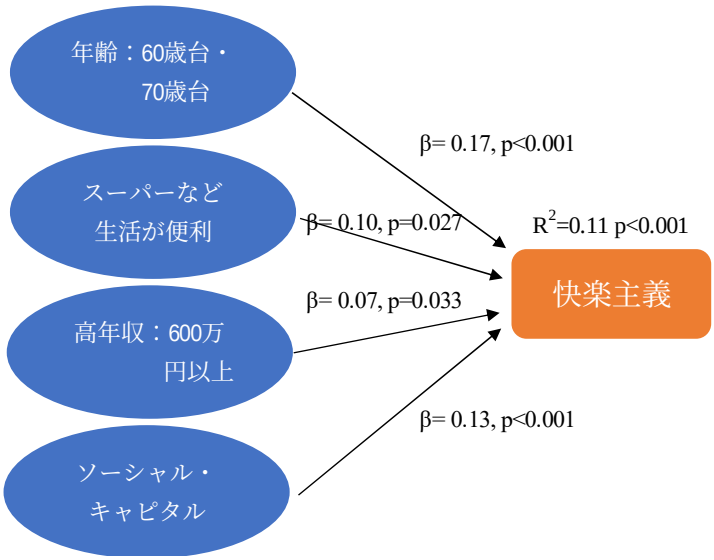

図 4　快楽主義と関連する要因

さらに、主観的健康感や世帯収入を調整した上で、ソーシャル・キャピタルと祭りへの参加頻度が人生満足度と関連しているのか、重回帰分析を用いて検証した。その結果、ソーシャル・キャピタルが高いと人生満足度は高く、祭りに参加している人が参加していない人よりも人生満足度が高いということが分かった(図 7)。

高齢になっても幸福感を維持できる地域づくりのためには、自己のコントロール力を育成する地域の教育と、ソーシャル・キャピタルが重要であることが分かった。このような地域では快楽主義の価値観も高いのではないかと思われる。

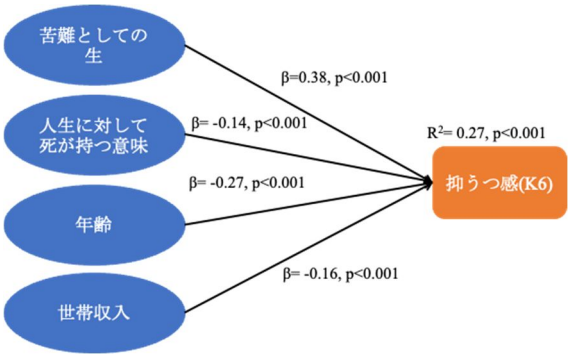

図 5. 死生観と抑うつ感の関連

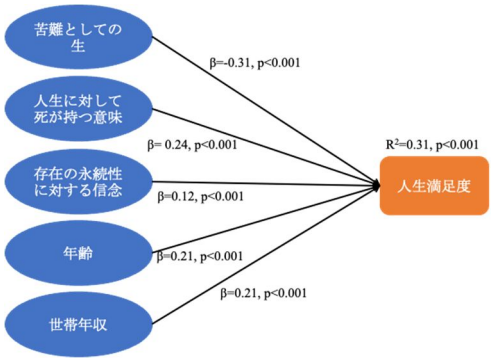

図 6. 死生観と人生満足度の関連

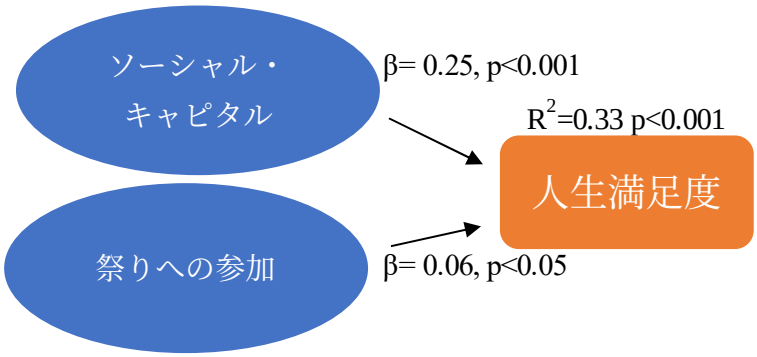

図 7　ソーシャル・キャピタル、祭りへの参加と人生満足度

【主な引用文献】

Diener E (1994) Assessing subjective well-being: Progress and opportunities. Social Indicators Research, 31(2), 103–157.

Hofstede G, Hofstede GJ, Minkov M (2010) Cultures and Organizations: Software of the Mind: Intercultural Cooperation and Its Importance for Survival. 3rd Edition. USA: McGraw-Hill.

Ryff CD (1989) Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. Journal of Personality and Social Psychology, 57(6), 1069–1081.

Steel P, Taras V, Uggerslev K, Bosco F (2018) The happy culture: A theoretical, meta-analytic, and empirical review of the relationship between culture and wealth and subjective well-being. Personality and Social Psychology Review, 22(2), 128–169.

【データの出典】

Ann Arbor, MI, (2016) Health and Retirement Study, (RAND HRS Data Products) public use dataset. Produced and distributed by the University of Michigan with funding from the National Institute on Aging (grant number NIA U01AG009740).

Börsch-Supan, A. (2022) Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe (SHARE) Wave 7. Release version: 8.0.0. SHARE-ERIC. Data set. DOI: 10.6103/SHARE.w7.800.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Hirokawa Kumi、Ohira Tetsuya、Nagao Masanori、Nagayoshi Mako、Kajiura Mitsugu、Imano Hironori、Kitamura Akihiko、Kiyama Masahiko、Okada Takeo、Iso Hiroyasu	４．巻 29
２．論文標題 Associations Between Occupational Status, Support at Work, and Salivary Cortisol Levels	５．発行年 2022年
３．雑誌名 International Journal of Behavioral Medicine	６．最初と最後の頁 299～307
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12529-021-10020-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hirokawa Kumi、Fujii Yasuhito、Taniguchi Toshiyo、Tsujishita Morihiro	４．巻 12
２．論文標題 Associations of testosterone and cortisol concentrations with sleep quality in Japanese male workers	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Comprehensive Psychoneuroendocrinology	６．最初と最後の頁 100158～100158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.cpnec.2022.100158	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hirokawa Kumi、Kasuga Ayaka、Matsumoto Kiyoaki、Omori Yasuko、Masui Yukie、Nakagawa Takeshi、Ogawa Madoka、Ishioka Yoshiko、Inagaki Hiroki、Ikebe Kazunori、Arai Yasumichi、Ishizaki Tatsuro、Kamide Kei、Gondo Yasuyuki	４．巻 22
２．論文標題 Associations between salivary testosterone levels and cognitive function among 70‐year‐old Japanese elderly: A cross‐sectional analysis of the <scp>SONIC</scp> study	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	６．最初と最後の頁 1040～1046
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.14504	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 香川 由美子、福田 正道、坪井 茉莉、廣川 空美	４．巻 13
２．論文標題 看護学教育における大学卒業段階での到達状況と卒業後の動向の把握 ： 大学教育へのフィードバックシステムの基盤構築に向けて	５．発行年 2023年
３．雑誌名 梅花女子大学看護保健学部紀要 = Baika Women’s University Research Bulletin－Faculty of Nursing and Health Care	６．最初と最後の頁 1～9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20832/00000300	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 廣川 空美、森口 次郎、脊尾 大雅、野村 洋子、野村 恭子、大平 哲也、伊藤 弘人、井上 彰臣、堤 明純	4．巻 68
2．論文標題 メンタルヘルス対策：職域と地域の連携のギャップを埋めるために	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6．最初と最後の頁 311～319
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11236/jph.20-135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hirokawa Kumi、Ohira Tetsuya、Kajiura Mitsugu、Imano Hironori、Kitamura Akihiko、Kiyama Masahiko、Okada Takeo、Iso Hiroyasu	4．巻 10
2．論文標題 Cardiovascular reactivity to acute stress associated with sickness absence among Japanese men and women: A prospective study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Brain and Behavior	6．最初と最後の頁 e01541
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/brb3.1541	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hirokawa Kumi、Ohira Tetsuya、Kajiura Mitsugu、Imano Hironori、Kitamura Akihiko、Kiyama Masahiko、Okada Takeo、Iso Hiroyasu	4．巻 66
2．論文標題 Job stress factors measured by Brief Job Stress Questionnaire and sickness absence among Japanese workers: A longitudinal study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 FUKUSHIMA JOURNAL OF MEDICAL SCIENCE	6．最初と最後の頁 88～96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5387/fms.2019-15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hirokawa Kumi、Kimura Takashi、Ikehara Satoyo、Honjo Kaori、Ueda Kimiko、Sato Takuyo、Iso Hiroyasu、Japan Environment & Children’s Study Group	4．巻 50
2．論文標題 Associations Between Broader Autism Phenotype and Dietary Intake: A Cross-Sectional Study (Japan Environment & Children’s Study)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Autism and Developmental Disorders	6．最初と最後の頁 2698～2709
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10803-020-04380-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hirokawa Kumi、Fujii Yasuhito、Taniguchi Toshiyo、Takaki Jiro、Tsutsumi Akizumi	4．巻 23
2．論文標題 Andropause symptoms and sickness absence in Japanese male workers: a prospective study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 The Aging Male	6．最初と最後の頁 1545-1552
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13685538.2020.1862078	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 程雨田，菊地亜華里，廣川空美，権藤恭之
2．発表標題 国や地域の文化的価値観と高齢者の幸福感との関連：SHAREデータによる13カ国の分析
3．学会等名 第33回日本老年医学会近畿地方会於大阪大学
4．発表年 2022年

1．発表者名 菊地亜華里，程雨田，廣川空美，権藤恭之
2．発表標題 アメリカ合衆国における高齢者の抑うつ感の地域差：HRSデータ分析
3．学会等名 第33回日本老年医学会近畿地方会於大阪大学
4．発表年 2022年

1．発表者名 Hirokawa K, Kasuga A, Gondo Y, Omori Y, Masui Y, Nakagawa T, Ogawa M, Ishioka Y, Inagaki H.
2．発表標題 Associations between salivary testosterone levels and cognitive function among 70-year-old Japanese elderly: a cross-sectional analysis of the SONIC study
3．学会等名 16th International Congress of Behavioral Medicine, University of Glasgow, UK（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 廣川空美・大平哲也
２．発表標題 仕事のストレスによる 心身のストレス反応と疾病休業 ―心身リフレッシュコースデータから示されたこと―
３．学会等名 日本ストレスマネジメント学会第19回大会，東北大学オンライン開催
４．発表年 2021年

１．発表者名 廣川空美，松本清明，権藤恭之，増井幸恵，中川 威，小川まどか，石岡良子，稲垣宏樹，池邉一典，神出計，新井康通，石崎達郎
２．発表標題 高齢者の血清テストステロン濃度とMoCA-Jによる認知機能との関連
３．学会等名 第32回日本疫学会学術総会オンライン開催
４．発表年 2022年

１．発表者名 廣川空美，春日彩花，権藤恭之，大森慈子，増井幸恵，中川 威，小川まどか，石岡良子，稲垣宏樹
２．発表標題 高齢者の記憶と唾液中テストステロン濃度の関連における性差
３．学会等名 日本心理学会第84回大会於東洋大学
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣川空美， 木村尚史，池原賢代，本庄かおり，植田紀美子，佐藤拓代，磯博康，Japan Environment & Children’s Study Group
２．発表標題 妊婦の自閉症傾向特性の特徴について：子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
３．学会等名 日本公衆衛生学会第79回大会於京都大学
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	権藤　恭之 (Gondo Yasuyuki) (40250196)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 (14401)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	菊池　亜華里 (Kikuchi Akari)	大阪大学・大学院人間科学研究科・大学院生 (14401)	
研究協力者	程　雨田 (Cheng Yutian)	大阪大学・大学院人間科学研究科・大学院生 (14401)	
研究協力者	松本　清明 (Matsumoto Kiyoaki)	大阪大学・大学院人間科学研究科・助教 (14401)	
研究協力者	松井　智子 (Matsui Tomoko)	大阪大学・大学院人間科学研究科・助教 (14401)	
研究協力者	マーティン　ピーター (Martin Peter)	アイオワ州立大学・Department of Human Development and Family Studies・Professor	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Iowa State University			